

[実践研究]

小学校外国語活動・外国語の授業に必要な 指導技術に関する一考察

小学校教員養成課程における「小学校英語指導法」と
「国語科指導法」の連携に向けての実践の試み

佐藤 佳子・林 次郎・山口 政之

An Experimental Case Study of Joint Courses in English and Japanese Teaching Methodologies for Elementary School Teacher Training at Keiai University

Keiko SATO Jiro HAYASHI Masayuki YAMAGUCHI

Following the announcement by the Japanese Ministry of Education (MEXT) of the new curriculum for teacher-training programmes, universities responsible for these programmes implemented the new curriculum starting in 2019. The Department of Child's Education at Keiai University has been running programmes in methodologies for teaching English and Japanese in elementary schools for several years. The new curriculum is intended to promote joint courses in teaching English and Japanese to children, but the combination of methodologies appropriate to teaching the two languages has raised a number of difficulties. Students taking these courses expect to learn appropriate methodologies. This experimental case study raises a number of relevant issues.

1. はじめに

本稿では、敬愛大学の小学校教員養成課程における講座「小学校英語指導法」、「国語科指導法」及び「3年次専門研究（国語科指導法）」の実践事例の一部を取り上げ、小学校外国語活動・外国語の授業に必要な指導技術を効果的に身に付けるための授業展開を紹介するとともに、「国語科指導法」で修得される指導技術が、小学校外国語活動・外国語の授業において応用できるかどうかについての検討を試みる。今後、国語教育との連携の可能性を検討するための実践報告とする。

2. 実践事例①「国語科指導法」「3年次専門研究」

2.1 研究の背景

小学校英語の授業で英語絵本を取り上げる際、学習活動には〈読み聞かせを聞くこと〉と〈英語の口慣らし〉^①がある。これらを教師の側に立ち、指導法で取り上げる内容として考えると、〈読み聞かせること〉と〈英語を言わせること〉となる。

いわゆる読み聞かせは国語科指導法における読書指導で授業でも取り上げているが、小学校英語の場合には国語科指導法と何が共通していて何が異なってくるのだろうか。また、〈英語の口慣らし〉とは、単語だけでなく絵本に出てくる短い文章も教師の音読を復唱しながら英語の音声を発する活動である。教師は自分の音読を聞いている子供の意識を英語（絵本上の文字や読み聞かせの音声、教師の発話など）に向けさせた上で復唱させるのである。このような指導に国語科指導法はどのように関わってくるだろうか。

このような疑問に対して実践を対象に小学校全科の立場から考察を加える。そこで得た知見からシラバスを見直し、授業改善に役立ててみたい。

2.1.1 読み聞かせから〈英語の口慣らし〉へ

本の読み聞かせは小学校の担任や図書館の司書などによって行われていたが、近年、保護者が小学校で読み聞かせのボランティア活動をする事例⁽²⁾が多くなってきた。子供の読書活動を活発にしたいという学校側の願いに、子育てで培った読み聞かせの技能をいかしたいという保護者の思いが応える形で広がっている。

国語科指導法の授業では、読書指導の一環として教師の読み聞かせを紹介するものの細かな表現技法までは取り上げない。また、具体的な教材を取り上げた授業の中で学生に本文を音読させて気になる読み癖などを指摘することはあるが、実技として全員が正しくできるところまでには指導できないのが現状である。

しかし、国語科指導法ゼミでは読み聞かせボランティアを求めている小学校に、読み聞かせに関して大学である程度の専門性を身に付けた学生を送り出すことを構想し、2年前から朗読検定⁽³⁾に取り組んでいる。朗読検定とは読み聞かせの基礎的な技法が身に付いているかどうかを判定する検定のことであり、検定の合格は朗読技能が一定の水準を満たしていることを証明するものである。学生に自信を持たせるだけでなく、学生を派遣する際、先方に学生の読み聞かせの能力を客観的に証明する根拠となる。検定合格後の学生による読み聞かせの出前授業は新聞にも取り上げられ⁽⁴⁾、その時の学生は読み聞かせに関して自信をもって卒業し小学校の教員となっていった。

今回、夏に朗読検定3級を取得したゼミ生が英語絵本を使った授業に挑戦する。国語科では読み聞かせるだけだが、小学校英語では読み聞かせの後に〈英語の口慣らし〉を指導する。その際、朗読検定や国語科指導法で学んだ指導技術が活用される。どのように現れるだろうか。

2.1.2 子供の発話を引き出す Shared Reading

イングランドで行われている読み聞かせの指導法の一つに Shared Reading（以下、「SR」と記す）がある。1988年のいわゆる「サッチャー教育改革」⁽⁵⁾では、具体的な施策の一つとして国語科の1時間の授業展開例

(The Literacy Hour) が示され、その中の言語活動の一つとしてSRが位置付けられている⁽⁶⁾。このSRについては「子供は大人の読み聞かせを聞きながら、親しんだ文章を記憶しはじめ、大人の読みに参加するようになる」と説明されたり⁽⁷⁾、「語や絵、話に焦点を当てた読み聞かせをしている時の大人と子供との活発な関わり合い」と定義されたりしている⁽⁸⁾。SRは本格的な文字学習に入る前の段階において、個々の学習者の発達に応じて文字情報と音声情報を緩やかに出合わせて連合させていくことをねらい、萌芽的リテラシー (Emergent Literacy) 能力の向上を目指すのである。

この考え方は我が国における新しい学習指導要領で示された外国語活動及び外国語の指導に通じるところがある。第3学年及び第4学年で行う外国語活動では、文字は「音声によるコミュニケーションを補助するものとして取り扱うこと」とされていて、第5学年及び第6学年で行う外国語では、「文字を見て、その読み方を適切に発音する活動」などへとつなげていくことが示されている。つまり、外国語活動では萌芽的リテラシー能力の向上をも目指しつつ、その後の外国語、英語科へとつなげていくことが望まれているのである。

こうしたSRを取り上げた小学校英語の実践研究に山口・小松 (2006)⁽⁹⁾がある。山口らの実践研究は国立大学教育学部の附属小学校の取り組みということで、学習指導要領の内容を先取りする形でデザインされており、ビッグブックの活用で文字と自然に出合わせる萌芽的リテラシーの指導だけでなく、SRの問いかけで既習表現を取り上げることなどを提案している。これらは現在の小学校教員養成課程外国語 (英語) コア・カリキュラムに通じる内容で、小学校英語指導法の内容に含めることができるか検討するに値するだろう。

2.2 研究の目的

本研究では、学習者の発話を促す絵本学習の模擬授業を通して、授業者が国語科の指導技術を活用していく様子を分析・考察することを目的とする。

2.3 研究方法

【研究対象】 本学こども教育学科国語科指導法ゼミの3年生9名⁽¹⁰⁾

【授業】 3年次専門研究の授業時間（2019年12月23日～2020年1月20日
までに実施した90分×4コマ）

【方法】

- ・国語科指導法における短歌の音読指導から、音声のインプットを想起させる。
- ・SRについて講義し、絵本を使った学習の授業計画を立てさせる。
- ・模擬授業に取り組みせ、音読とSRの指導場面の記録を作成し考察を加える。

2.4 *From Head to Toe* (Eric Carle)⁽¹¹⁾ の教材分析

見開きに1匹の動物と一人の子供がいる。その動物は体の一部を動かして「できる？」と問う。すると子供は「できるよ！」と答える。これを11匹の動物が繰り返し、最後のページで少年が足の指をぴくぴく動かし、オウムに「できる？」と問う。ストーリーがあるわけではないが、色美しい紙素材をコラージュして表現された登場人物は動きがあり、生き生きとしている。

中表紙をめくると見開きの左側に首を回したペンギンが「I am a penguin and I turn my head. Can you do it?」と問う。見開きの右側にはペンギンと同じように首を回す動きをした子供が「I can do it!」と答えている。次のページには、首を曲げたキリン。その次は肩をもち上げたバッファローと続く。見開きごとに動物たちの特徴を生かした動きが示され、その動物が「Can you do it?」と問う。その右のページでも子供は「I can do it!」と答えている。

取り上げている単語は、動物名、体の部位名、簡単な動詞。さらにCanを使った構文が繰り返されている。見開きごとに小さなアクティビティを行うのに適した構成であり、民間の英語教室や小学校で人気のあ

る絵本教材として知られている^{(12) (13)}。

2.5 授業デザイン

3年次専門研究の時間を使い、次のように4コマの授業を構想し、展開した。

① 1コマ目 (12/23)

- ・テキストの概要を知る。
- ・ストーリーを聞く (朗読CD)。
- ・音読する。
- ・学習プランを作成し、検討する。
- ・国語科指導法で学んだ音読指導を復習する。
- ・学習プランを修正する。

② 2コマ (1/8)

- ・SRの講義
- ・SRの演習 (1人が教師役、残りの8人が子供役)
- ・小学校英語の授業におけるユニットの考え方を知る。
- ・模擬授業のユニット構成を検討する。

③ 3コマ (1/8)

- ・音読 (追い読み) の演習 (男女別の2グループに分かれて)
- ・メインアクティビティの検討をする。
- ・模擬授業に向けた学習プランを作成する。

Aチーム：ゼミ生相手に行うグループは一人で1プランを作成する。

Bチーム：ゼミ生を小学生に見立てて行うグループは4人で協力指導 (学習場面ごとに分担) をするような1プランを作成する。

④ 4コマ (1/20) 【模擬授業】

- ・当日は共同研究者の林に講評を依頼した。

Aチーム (大学生相手)：一人で一つのユニット (5～10分程度) を展開する。

Bチーム (小学生相手を想定)：4人で45分を展開する。

写真 1 SRの演習風景



2.6 模擬授業の考察

模擬授業の中から音読とSRを取り上げた学生を対象に（それぞれ1名）、ビデオカメラで録画した映像データから音声データを抽出して文字に起こした。教師役の発話には通し番号を付したが、子供役の発話は付していない。以下、研究の目的に即して国語科の指導技術と関連すると思われる場面を引用し考察を加える。

(1) 〈英語の口慣らし〉(学生A：中高英語副免取得予定)

普段から明るく、模擬授業では高いテンションで学習者を引き付けていくタイプの学生である。教育ボランティアサークルに所属していて、定期的に子供に図工等の指導をしている。

一度全体を通して読み聞かせをしたという前提で、追い読みを中心とした〈英語の口慣らし〉を行った。見開き12場面のうち5場面（5動物）を取り上げ、指導時間は4分55秒であった。

【追い読み】

T4: I am a penguin (手でリピートを促す)

C: I am a penguin

T5: And I turn my head.

C: And I turn my head.

T6: Can you do it?

C: Can you do it?

T7: I can do it!

C: I can do it!

〈考察〉「Please, repeat after me.」と言葉で指示をしないで、掌を向ける仕草でリピートを促していた。教師役と子供役の呼吸が合っている。国語科指導法で学んだ追い読みの基本は概ね身に付けている。しかし、短いスパンでペンギンの台詞を言わせた後には、「I am a penguin and I turn my head.」という1文（長いスパン）でも追い読みをさせたい。

【単語の発音練習】

T8: Ok. Penguin.

C: Penguin.

T9: Penguin.

C: Penguin.

〈考察〉発音が日本語の「ペンギン」にならないよう、畳みかけるように繰り返し言わせていた。国語の授業では単語レベルで追い読みをさせることはあまりないが、小学校英語では英語らしい発音を身に付けさせるために大切な指導である。

【雰囲気づくり】

T41: Haruka, *what's mean wave?

C: / Kunekune /

T42: That's right. That's right. / Kunekune/

T43: Let's / Kunekune / !

C: (子供達は両腕を横に出しくねくねさせる)

T44: Best / Kunekune / is Kohei.

〈考察〉まず、T41の質問文は正しくは「what does wave mean?」になるが、ここでは教師役の質問の意図が理解されてしまった。小学校英語だからといって不正確な表現が許容されるわけではない。正しいクラスルーム・イングリッシュを身に付けることについては、今後の個別課題

としたい。

Waveの意味を問われて、とっさに「くねくね」と答えた子供役の学生。授業者はそれを笑顔で肯定的に受け止め、さらに「Let's / Kunekune / !」と指示して授業を進行させた。子供役の学生は嬉しそうに腕をくねくねさせていた。それを見て授業者はさらにT44で「Best / Kunekune / is Kohei.」と言って元気よく体を動かしていた子供役の学習態度を称賛していた。

この時の教室の雰囲気はのびのびとした明るさに包まれていて、子供達の素直さがよく引き出されていた。こうした学びの雰囲気や空気といったものは、それを対象化して研究することは難しいが、子供の発話を引き出すには教室における学びの雰囲気が大切であることは言うまでもない。この場面での1分にも満たないわずかなやり取りについて、教育実習指導の立場からコメントするならば、「子供とのコミュニケーションの取り方が上手」と褒めたいところである。小学校教師であればどの教科の授業であっても授業中の子供の発言を取り上げながら授業を進めることで子供を授業に引き込んでいく。この教師役の学生の小学校教師としての素質を感じさせる一コマである。

しかし、小学校英語としては、T43では英語で「Let's wave your arms.」と指示を出し、waveの意味を日本語に置き換えないで動作化させるべきであった。

(2) SR (学生B：中高英語副免取得予定)

明るく淑やかな学生で、学友会の会長を務めるなどリーダーシップがとれ、コミュニケーション能力が高い学生である。また、教育ボランティアサークルに所属していて、定期的に子供に工作等の指導している。

指導時間は3分58秒のSRでは、テキスト本文の読み聞かせの合間に、内容に関連する問いかけがなされた。発話総数は42で、子供への評価は16で最も多く、質問は14、動作指示は2であった。

【子供への評価】

- ① 子供の答えを復唱して評価する。

写真 2 SRの模擬授業風景



T6: Do you know this?

C2: Giraffe.

T7: Giraffe. It's good. Giraffe.

〈考察〉 まず、T7のように復唱することで望ましい英語の音声を自然に子供に聞かせ、インプットすることができる。そしてほめて自信をもたせる。このほかにも、T3 Ok, good. T18 Good job. など、要所要所ですかさず肯定的な評価をしていた。このように子供の発言に反応・評価することは、国語科指導法や教育実習指導の模擬授業でも繰り返し指導してきたことである。常に意識して実践している点は模範的であった。こうした積み重ねが今後の発話にもつながると思われる。

② 評価して正しく言い直させる。

T23: Do you like this animal? Junya?

C1: Yes.

T24: Ok. Yes, I do.

C1: Yes, I do.

〈考察〉 英語でのやりとりに慣れていないとショートアンサーになってしまう子供がいる。そのような時はT24のように「Yes, I do.」と正しい答え方を示して、C1のように当人に言わせるようにする。これもよくできていた。

【質問】

① 知識を問う

T6: Do you know this?

C2: Giraffe.

T7: Giraffe. It's good.

〈考察〉 簡単な質問でも英語で問答することに意義がある。このページを開いているからこそ必然性がある問いとなる。

② 好みを問う

T40: Do you like this animal? Ayaka?

C1: Yes, I do.

T41: Yes, I do. Good.

T42: Do you like this animal? Maika?

C2: Yes, I do.

〈考察〉 相手を変えて同じ質問をする。短時間ではあるが日本語を介さない状態が生まれる。このような英語での会話が続いている時間を積み重ねていくことが大切である。また、慣れてきたら How about you? と問いかけてもよいだろう。そういった授業構想には年間指導計画を視野に入れなければならないので、今後の課題としたい。

③ 所有を問う

T26: I am a cat and I arch my back. Can you do it? I can do it!

T27: Do you have a cat? Naoki?

C: Oh, yes, I do.

T28: Masaki?

C: Yes, I do.

T29: Yes, I do. Good.

〈考察〉 この絵本では12種類の動物が出てくるので、特定の動物のページを開いて教師が所有を問うことは、子供の発話を促す。猫のように飼われている可能性が高い動物については Yes, I do. と答えさせるだけでなく、Do you have any cats? と正しい形で質問し、How many cats do you

have? とたたみかけるように質問してもいいだろう。

SRにおける問いかけの表現は、既習事項を踏まえて取り入れたり、本時から取り入れるようにしたりと年間指導計画を踏まえる必要があることを指導したい。

④ 質問の省略

T26: I am a cat and I arch my back. Can you do it? I can do it!

T27: Do you have a cat? Naoki?

C: Oh, yes, I do.

T28: Masaki?

C: Yes, I do.

T29: Yes, I do. Good.

〈考察〉 T28はMasaki?と語尾を上げて指名した。状況から判断して同じ質問が繰り返されていることは容易にわかる。質問を省略しても国語の授業なら問題はない。しかし、SRで一人一人の発話を引き出し、英語での対話を大切にしようとするのであれば、Do you have a cat? か Do you have any cats? と質問し、子供の発話を促さなければならない。

【動作指示】

T1: I am a penguin and I turn my head.

T1-2: I turn my head. (テキストを2回読んでいる)

T1-3: Can you do it? I can do it!

T2: Please touch your head.

C: (子供役、自分の頭を触る)

T3: Ok, good.

〈考察〉 この絵本では12種類の動物がそれぞれ違った動きをして、発話の中でその動詞を使う。意味を日本語に置き換えなくても絵を見れば子供にわかる。ビッグブックを通して軽く文字情報にも触れることもできる。また、定番の英語歌 Head, shoulders, knees and toesを導入で歌っているので、ここでは体の部位を表す単語の復習という扱いになる。

授業者はT1-2で「I turn my head.」を繰り返し読んでいる。1ページ目

でturnもheadもキーワードだから丁寧にインプットしようという意図が感じられる。そしてT2で頭を触るように指示を出す。子供役は自分の頭を触る。活動が英語で自然に進んでいる。このように教師の指示に合わせて体を動かすことが、子供の発話を促す前段階として計画的に位置付けられていた。

国語科では「動作化」といって読み取った内容を演じて表現することがある。1年生の子供が「大きなかぶ」を引き抜く場面を演じ、登場人物の心情を思い描くことは知られている。しかし、ここでは登場人物の心情を思い描くといった国語科の学習事項は全く考慮されず、単純に体を動かすだけである。非常に素朴な活動である。

【発音指導】

T33: I am a camel and I bend my knees. Can you do it? I can do it!

T34: This is a camel.

T35: A camel. (/m/の発音を確認するにははっきりとゆっくり発音した)

Camel.

T36: Touch your knees.

C: 子供役、一斉に自分の膝を触る。

T37: Ok, good.

〈考察〉 英語らしい発音のインプットを行うことに対する意識が高く、日本語の「キャメル」にならないよう camel の/m/を発音していた。このようにSRによる指導とはいえ発音指導をおろそかにしてはならない。絵本のテキストから This is a camel.と短文を発し、そこから a camel、そして camel とインプット重視の指導を行っている。ここは子供に言わせてもいいだろう。

国語科では1年生で発音に関する口形指導を行う。手鏡で口元を映しながら「あ、い、う、え、お」と、口をはっきり動かしながら発声するのである。その後、口形以外でアクセントやイントネーションなども必要に応じて取り上げていく。その際、教師が手本を見せてから子供にやらせて、それをほめる。今回は「子供にやらせる」というところがみら

れなかった。ここは課題である。

2.7 まとめ（明らかになった課題）

授業者にとって英語の追い読みはそれほど難しい指導ではないので、授業経験の乏しい学生でもできた。しかし、〈英語の口慣らし〉はただ声に出させればよいのではなく、英語の正確な発音にこだわらせなければならない（例えば、giraffe の /ra/ が /la/ にならないように）。教材研究の段階で、授業者が自らの英語力から考えて苦手な発音は繰り返し練習しておかなければならないし、子供にとって苦手と思われる発音については口形や発音の仕方などを助言できるようにしておかなければならない。音声へのこだわりをどの程度授業で具現化できるかを問題にしなければ、国語科の追い読みが単純に小学校英語に役立つとは言えない。

また、SRでは教材研究の段階で文法的に正しい質問文を用意しておくことが必要であること。子供の答えを聞いて望ましい形で言い直させることができるような英語力を身につけておくこと。それに加えて、子供の発話に対して臨機応変に英語で対応できることが求められる。そしていかなる場合でも英語らしい音声のインプットを行わなければならないことを意識して授業に臨まなければならないことが確認できた。

（注）

- (1) 松香フォニックス研究所（1999）『パーフェクトレッスンプラン絵本編初級』で紹介されているように民間の英語教室では早くから絵本を使って音読指導を行ってきた。しかし、小学校英語では読字活動としての「音読」とは言えないので、ここでは〈英語の口慣らし〉という。
- (2) 小学校のホームページを閲覧すると、日々の学校生活の様々な活動や学習の様子が写真とともに紹介されている。複数の小学校のホームページを閲覧すると、保護者による読み聞かせや登下校の安全を守るボランティア活動などが盛んに行われていることがわかる。
- (3) ここで言う「朗読検定」とは一般社団法人日本朗読検定協会が行っている朗読の検定試験である。学生が受験した3級は「脱初級者」と位置付けられ、語りと台詞の違いを聞き手が区別できるように読むことが求められ、アクセントやプロミネンスなどについても学ぶ。
- (4) 毎日新聞（2017年9月26日）大学倶楽部・敬愛大「総読検定資格を取得 学生たちが地元小学校で『読み聞かせ』」 <https://mainichi.jp/univ/articles/20170926/org/00m/100/020000c>
- (5) 阿部菜穂子（2007）、『イギリス「教育改革」の教訓』、岩波ブックレット
- (6) Department for Education and Employment（1988）、The National Literacy Strategy:

- Framework for Teaching, 2/98 pp. 8–14.
- (7) Julie Spreadbury (1998), Facilitating Preschool Literacy, Campbell Editor, p. 31, International Reading Association.
- (8) Ezell & Justice (2005), Shared Storybook Reading, p. 203, Paul H. Brooks Publishing.
- (9) 山口・小松 (2006) 「英語によるコミュニケーションの意欲と能力を育てる絵本学習」、『研究紀要第40号 学びのつながりを育む』123–132 ページ、千葉大学教育学部附属小学校。
- (10) 専門ゼミにおける取り組み (朗読検定受験から読み聞かせボランティアの実践) については山口 (2018) 「教職を目指す学生の授業運営力向上に関する実践的研究」、『国際学部創設20周年記念論文集』49–58 ページ、敬愛大学国際学会、において報告している。今回の3年生も同じように活動している。
- (11) 模擬授業用には HarperCollins 社のビッグブック (ISBN 978-0-06-111972-9) を、グループワーク用に Penguin Books 社の通常サイズのもの (ISBN 978-0-14-056378-8) を用意した。また、松香フォニックス研究所から *From Head to Toe* の朗読 CD が1999年に販売されており、民間の英語教室だけでなく小学校の教室でも活用されている。
- (12) 国語科に群読という言語活動がある。学習者が詩などの作品の解釈を持ち寄り、集団で音読を作り上げていく表現活動である。入門的な指導では教師が分担台本を作って学習者に与え、群読を体験させることもある。小学5年生の国語教科書にも掲載されたことがある山田今次の「あめ」は群読の典型教材として小学校では知られている。*From Head to Toe* は小学校英語の典型教材と言ってもよい。このような典型教材を指導法で取り上げておくことは教職に就いた時に子供の前に立つ自信を与えることにつながるだろう。
- (13) 最近では、逸見シャンタルらの『小・中・高等学校における内容言語統合型学習の教材開発に関する実践的研究』(公益財団法人教科書研究センター、2019年) の中にも小学校での実践事例として *From Head to Toe* を取り上げた授業が紹介されている。しかし、この実践では、絵本の内容をオリンピックへと発展させているところが独創的である。

(山口政之)

3. 実践事例②「小学校英語指導法」

小学校英語指導法の授業の進行一案・ コアカリキュラムとの関連において

——模擬授業を主眼においた授業実践と学生の評価コメントから——

3.1 研究の背景

2017年3月末に告示された次期学習指導要領が3年間の移行期を終え、2020年4月より完全実施となる。その間に全国各地で小学校現職教員向けの外国語活動及び外国語科研修会・研究会が開かれ、多くの先生方が参加するなどその盛況ぶりが報じられている。しかしながら、この時期になっても、学校現場の先生方からは英語指導に関する知識不足、授業

運営への自信のなさ、英語によるコミュニケーション能力の不足などについての多くの嘆きが聞こえてくることも事実である⁽¹⁾。こうしたことから小学校教員養成機関における学生の英語指導力向上に対する要請は益々高くなるはずである。

2019年文部科学省総合教育政策局教育人材政策課は、教職課程認定申請の手引き（令和3年用）をホームページ上に掲載し、「外国語（英語）コアカリキュラムについて」の項目を示した⁽²⁾。その中で「全体目標」として「小学校における外国語活動（中学年）・外国語（高学年）の学習、指導、評価に関する基本的な知識や指導技術を身に付ける」を挙げ、「学習内容」の中に「2. 授業実践（1）指導技術◇一般目標：実践に必要な基本的な指導技術を身に付ける。（2）授業づくり◇一般目標：実際の授業づくりに必要な知識・技術を身に付ける」を挙げている。だが実際は、小学校現場が指導者確保の要件として小学校教員養成機関に対し求めるものは、「小学校外国語教育についての基本的な知識・理解」と同時に授業実践「指導技術」、「授業作り」の両方であるが、むしろ後者に係る履修を終えた即戦力としての人材を求めているのではないだろうか。

本稿では、前述のコアカリキュラムとの関連に触れながら、本学での授業において重要項目として位置付けている模擬授業実践の中でどのような点に注目してプレゼンがなされ、その体験を通して学生たちの教師志望の想い、そして授業実践への考え方がどのように変容するかを学生諸君が記した模擬授業評価表を通して示すこととする。

3.2 本学での小学校教員養成課程における履修授業

「小学校英語指導法Ⅰ」の展開について

本学では、こども教育学科の小学校教員免許取得のための履修条件として、小学校英語Ⅰ、小学校英語Ⅱ、小学校英語指導法Ⅰ、小学校英語指導法Ⅱを位置付けている。小学校英語Ⅰでは授業で活用可能なアクティビティの実際の運用を目的として1学年後期に3名程度のチームでプレゼンを行う。小学校英語Ⅱでは、小学校英語Ⅰで取り扱ったアクティ

ビティ及びゲームをそれらの組み合わせに工夫しながら2学年前期で実際の授業過程を想定した構成でプレゼンを進める。さらに3学年前期からは小学校英語指導法Ⅰにて、そして3学年後期に小学校英語指導法Ⅱにおいて、より実践的な授業運営を体験することで4学年に行われる教育実習につなげている。

そこでまず私論ではあるが、この授業を展開する上で、目指す外国語活動及び外国語科指導者像を示す。

- ① 英語という外国語を使いながら自信をもって授業に臨むことができる。
- ② 担当する児童の実態を踏まえながら、自分自身のスタイルの授業を創ろうとする。
- ③ 言語習得理論を基に指導計画を作成できる。
- ④ ALT、英語専科などの人材条件、ICTなどの設備条件（物的条件）に応じた授業を展開できる。

以上のような目標に迫るために、小学校英語Ⅰ、小学校英語Ⅱ、小学校英語指導法Ⅰ、小学校英語指導法Ⅱという一連の授業においては、シラバスに示されている「小学校外国語教育についての基本的な知識・理解」という観点から、履修期間中に一人最低2回の模擬授業を行い、その後、授業者の「反省」と児童役となった学生からの「感想」という形で評価を発表させるなど全体でdiscussionしていくという方法をとった。そして最後に必ず、担当教員からの視点から、「評価できる点」と「改善点」を示してきた。

また、授業後のdiscussionにおいても、数人の、多い時は10人程度の学生に発言の機会をあたえているが、担当教員はそれらの多岐に渡る意見、評価にも肯定的に反応することになっている。「自分の評価」に対する肯定的なfeedbackにより「評価の目を磨くため」と「自分の評価に自信をつけるため」である。さらには、これらの取り組みにより、自身の英語力不足を痛感しさらなる英語学習につながることで、発言の機会が増えること、自身のプレゼンにより多くのステップアップを求める motiva-

tion になると思われるからである。

3.3 学生のアンケート及び評価表から

[小学校英語指導法Ⅰ]

・授業開始前の感想

(1) 模擬授業開始時期

- ・(教えることに不安は) とてつもなくあります。自分自身が英文法など今まで学習してきたことが身につけていなさすぎるから人に教える自信は皆無です。
- ・不安はあります。ALT の先生とうまく話せるか、英語がわからず授業に参加しない児童が出てしまうのではないかとすることに不安になります。
- ・(不安は) あります。まだ自分自身に教える立場に立つような知識、スキル、実力がないため、いざその場面になったら考えると不安です。

(2) 模擬授業終了時期

- ・授業終了後の感想(確認試験より)
- ・この4ヵ月の授業を受けて、考えれば考えるほど、授業は良いものになるのだと感じた。外国語の授業は難しく、他の授業よりも児童の興味関心を引かなければならなくて大変だけれども、その分他の授業よりもたくさん工夫ができるし、児童にとって楽しい時間に行うことができると思う。
- ・外国語指導の難しさを痛感した。今まではアクティビティが盛り上がりれば良いという考えだったが、自分たちが設定した目的にして導入から流れを作っていくことを重視して授業づくりをするようになった。しかし、それをするにはその学年の児童が何を知り、どこまでの能力があるのかを理解していなければならないことが分かり、それと同時に自分の力不足を感じた5ヵ月間だった。
- ・私は英語が得意ではないため人前で英語で授業を行うことにとても

苦労した。そこで自分の無力さも感じた。実際の現場に立つことを想定すると、今のままではALT、もしくは専科の先生に頼り切りになってしまうかもしれない。現時点で堂々と英語で話せている人もいて、それは良い刺激になった。流暢にとまではいかなくても基本的な部分はスムーズに使えるようになりたいと感じた。各グループの模擬授業を見てきて多くのことを学ぶことができた。また、こうした方がもっと良くなるだろうと考えながら見ることができた。

- ・一つの授業を展開するのはすごく大変なことだと改めて実感したとともに楽しいと思えた。今回のテストの4で児童が楽しめる授業を心がけたいと書いたが、それには自分が楽しくなくてはいけないと思う。そういった考えを持って今後も授業づくりをして行きたい。小学校英語指導法Ⅰで学んだことは私の英語の授業作りの基礎となるものである。このことを忘れず、またここから自分なりに工夫して授業づくりに取り組んでいきたい。
- ・実際に教員になる上で必要となるかもしれないモジュール授業をシラバスに含んでいたのは貴重な体験だったし、練習になるし、いい経験をつませてもらったなと思いました。
- ・たくさんの発表を見て、色々な方法を知ったし、自分の課題や強みも少し分かった。これからは課題を改善していき、英語力をつけ、強みを伸ばし、楽しい授業ができるように努力していこうと思った。また、たくさんの指導方法をもっと知りたいと思わせられたので、たくさん学び、子どもたちにとって分かる授業ができるようになりたいという希望が生まれた。英語だけでなく、他の科目の授業にも活かすべき考えや配慮をたくさん学ぶことができた。
- ・私は外国語に苦手意識があるのでモジュールなどは特に、苦しい部分もあったが、授業で多くの模擬授業を受けたり、実際にやってみて授業をつくる上で大切なことをたくさん学ばせてもらいました。小学校の外国語は何より教員が楽しむ、子どもを楽しませることが大切だと先生に教わったのでそういうことをどの授業でも大切にし

ていきたいと思います。

[小学校英語指導法Ⅱ]

・プレゼン後の相互評価活動について

(1) 模擬授業開始時期

- ・しっかりと説明されていて留意点もおさえていた。何度も表現し、話の内容を理解させようとしてできていました。IをWeに変えてアクティビティで活用できていました。たくさんの方に分かるプリントの教材を使っていたためはっきりと発音することができた。
- ・あまり日本語を使わないように繰り返したりジェスチャーを加えたりと工夫されていた。説明部分をもう少し省いたらより良くなると思う。表情がとても良かった。発言したら笑顔が応えてくれる印象があった。また、教師役自身が積極的に児童役に声をかけている様子が見られた。
- ・明るい雰囲気、笑いが出るが、聞くときには聞くという場づくりが良かった。

(2) 模擬授業終了時期

① プレゼン後の授業評価

特に印象に残った内容は「導入」である。これは評価の観点からみると初めの部分で十分なインプットが仕組まれていたことと、教材、教具、黒板を効果的に使用していたことである。優れた点は「授業の流れ」である。これは学習内容の難易度、文量が適切である。また、「聞く」「聞いて動く」「繰り返す」「使う」の流れである。

- ・二人の発表は繰り返しがとても多く、児童が慣れるまで「繰り返す」を行っていたのが印象的であった。また、班になって順番に役を代わることで一人残らずに参加することができていた。
- ・児童にインプットさせる段階での繰り返しの際、児童の反応を見て繰り返しの回数を調整しているのが素晴らしいと思った。改善すべき点としてはアクティビティが少し間延びしてしまったことだ。
- ・ほかの班のアクティビティで使われていた。先生役の学生のテンシ

ョンが高く、子どもも答えやすい質問をし、スピード感のある飽きないアクティビティを使っていたことが優れていたと思った。しかし、同じ質問や返答になってしまい、単純すぎるのが改善すべきところかなと思いました。

- ・この発表で優れていた点はほかの班と違いICTを上手く活用した授業展開だったので、スムーズに進んでいただけでなく、児童の興味関心を引き付けるような点である。改善点としては、反転授業のことであり、家庭での学習が前提であったこの授業は家庭の事情でYOU-TUBEが見れなかった児童への配慮が少したりないのではないかと考えた。
- ・授業構成の面から「聞く」から「使う」までの過程がしっかりしていた。「聞く」という場面ではT-Tの「やりとり」をたくさんすることで、どんなことを学習するのかということに気づかせていた。指導案の目標に「自分になりたい職業が言えるようになる」とあったが、「アクティビティ中では決められた職業で仲間を見つける」という活動になっていた。そのため“want to”を使った文は言えるようになったが、自分の考える将来の夢については言えなかった。職業の部分をもって児童が自由に考えられるように工夫できたら良かったと思う。

② 授業終了後の感想

- ・classroom Englishを多用して、少しでも英語に触れさせることで児童の英語の習得を促すことができたと思った。私が小学生のときの外国語活動の時間では、単語練習を繰り返し行ったり、一通りの流れを（日本語で）説明してからアクティビティを行っていたが、今回の授業ではアクティビティをする中で児童の気づきを促し習得させる重要性がわかった。

3.4 考 察

1年次後期に始めて履修した教職科目である「小学校英語Ⅰ」の第一時

問目に書かせた感想では、「自信がない」「こんな自分が英語を教えられない」「英語が苦手」という記述のオンパレードであった。それが試行錯誤を繰り返しながら模擬授業の経験を積み、仲間の授業を自分なりに考えながら評価していくにつれて、どのような授業が望ましいのか、指導者として学習者である児童にどう働きかけをすべきなのか、また、その場でどう評価すべきなのかに気づく。そうした過程を経験しながら少しずつやり方を身に付けていく様子が、実施時期が異なる感想からわかる。そして、授業の見方も毎回模擬授業後に行った評価表への記入を重ねるごとに、学生の授業分析が変容していることがわかる。最初のころは練習の回数であったり、教具の使い方であったり、部分的で断片的な捉え方であったものが、言語習得の段階や授業全体の流れに言及するなど、総合的、総括的な見方をする学生が増えてきている。また、その成果は学生自身の授業実践にも大きな影響を及ぼしていることが、確認試験の最後部に書かれた自由記述からもわかる。

評価表の評価欄の上部に示している評価項目に沿って他の学生の授業を見ることで児童による「気づき」を基にした授業の分析力がつき、それによって自分自身の模擬授業の内容、ポイントにも着目するようになった。もちろん、授業実践はそれほど簡単に、そしてそれほど短期間に向上するものではないし、期待されるほど大きく改善されるものでもない。しかし、それらの積み重ねがよりよい授業を創り、効果的な授業運営を進めていくことに疑いはない。

3.5 結 果

小学校教員養成課程において、外国語活動、外国語科での授業展開力をつけるためには、模擬授業を実施させ、その後で評価表をもとに授業者の反省と仲間の感想を出させ discussion を行うことが、履修学生の指導者としての自信をつけさせ、自主的、自律的な英語力向上への努力の動機付けにつなげる上で有効である。また、模擬授業の直後に担当教員によりなされる講評が学生のやる気を高め、新たな授業の創造を生むこ

とになる。

3.6 今後の授業の展望

今後とも更に模擬授業の実践を通して、学生たちの「気づき」と「改善」を促し、よりよい授業の在り方を追求させ、より高いステップへの動機付けに結びつけようと考えている。

今後、益々期待される教室設備や ICT 教材の充実により、更に授業での運用が求められることになる。そのために教師側の ICT の運用技術を習得するための機会を増やす必要があると考える。

- (1) 松川禮子「教科『外国語』全面实施を目前にして」『英語教育』2020年2月号。
- (2) 文部科学省総合教育政策局教育人材政策課（2019）『教職課程認定申請の手引き（教員の免許状授与の所要資格を得させるための大学の課程認定申請の手引き）』文部科学省。

（林次郎）

4. まとめにかえて

敬愛大学の小学校教員養成課程における「小学校英語指導法」及び「国語科指導法」「3年次専門研究」での授業事例の一部を取り上げ、小学校外国語活動・外国語の実践に必要な指導技術について検討した。そして、「国語科指導法」で修得する指導技術が小学校外国語活動・外国語の実践においても応用できるかどうかについての検討も試みた。今回は、ごく一部の実践事例の分析にすぎないため、今後は研究対象を広げ、調査の実施と分析を行い、国語教育との連携に向けて、具体的な方法を示していきたい。

〔付記〕 本研究は「平成31年度敬愛大学研究プロジェクト（共同研究）助成」（研究代表者：佐藤佳子）の成果の一部である。